

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.32-2 (通巻94号) 2024.11.29発行

リニューアルオープンから1年 一歩んできた道とこれからの展望

勝村 誠 (立命館大学国際平和ミュージアム副館長 メディア・資料セクター長)

立命館大学国際平和ミュージアムが第2期リニューアルオープンしてから、1年2ヶ月が経ちました。全面的なリニューアルであったため、開館以来、各方面から称賛の声をいただく一方で、とりわけリニューアル前の展示を愛してくださっていた方々からはとまどいの声も伝えられました。しかしいまでは私たちがリニューアルに込めた理念に徐々に共感の輪が広がりとつとあると感じています。

まず原点を確認しますが、戦後の立命館大学は「平和と民主主義」を教学理念に掲げて教育研究活動を展開してきました。一方、京都においては1981年から平和運動を担う市民を中心に「平和のための京都の戦争展」(以下、「戦争展」)が開催され、その成果として膨大な戦争遺品や貴重な資料群が発見されました。

1980年代から90年代の日本では、戦場や銃後での被害と加害にまつわる体験がようやく客観的に評価され始め、沈黙していた人々が自己の体験を告白・告発し、あるいは、口を閉ざしたままこの世を去った方の遺族に残された遺品が発見され始めた頃でした。立命館大学国際平和ミュージアムはそのような「戦争展」の運動と共同して1992年5月19日に開館しました。

ですから、「戦争展」の成果と、その運営を支えた「中野基金」のレガシーを継承することは立命館大学国際平和ミュージアムのミッションであり、第2期リニューアルにおいても変わらないことのない基本理念です。

1992年に開館した立命館大学国際平和ミュージアムの展示は、おのずと1931年の満州事変から日本敗戦までの戦争体験にまつわる戦争遺品の展示が中心となりました。もちろん、戦後の平和運動や日本の戦争加害に正面から目を向けて展示を構成したことは画期的だったと思いますが、主には「日本人にとってのアジア太平洋戦争」を考える展示であったと思います。

その後、グローバル化が急速に進行し、立命館大学にも国際学生が飛躍的に増え、ミュージアムにも全世界からの来館者が訪れるようになりました。それゆえ、立命館大学国際平和ミュージアムの第2期リニューアルは、「アジア太平洋地域に位置する日本の学園として、歴史を誠実に見つめ、国際相互理解を通じた多文化共生を目指す」(立命館憲章)との理念のもと、近代の戦争と平和について総合的に理解できる展示、そして、世代や地域を越えた対話を通じて共感できる展示へと創造的に展開することが求められました。

そのためには、18世紀後半に欧米列強を中心に世界を席巻した帝国主義についての深い理解が必要です。現在のウクライナやガザの戦争にもつらなる視点です。第2期リニューアルの展示は、アヘン戦争からウクライナ戦争まで、大きな因



果関係が理解できるように工夫された展示にしました。

日本については、明治国家の国境画定を起点として、対外的に初めて軍事力を発動した台湾出兵から、琉球処分、日清・日露戦争へと進む帝国主義的拡張政策から理解せずして、アジア太平洋戦争のことはわかりません。テーマ展示1では、日本が戦争を重ねながら植民地・占領地を拡大していったありさまを、そしてそれが現地の人々の生活を一変させたことを、6つの地域に分けて一望できるようにしました。おそらく世界初の画期的な試みであると思います。

このように日本と世界の近現代史を総合的に描くことになった背景としては、学界の研究成果を反映させねばならないとの私たちの使命感がありました。1990年代以降、日本でもアジアの諸地域を研究対象とする研究者が増え、植民地支配責任を問う研究、人の移動に着目する研究、支配された側の被害実態に切り込む研究が重ねられてきました。立命館大学国際平和ミュージアムは大学立博物館であるからには、最新の研究動向を展示に反映させねば存在意義がないと私たちは確信しています。

先だって、9月中旬に京都市内の小学校5年生が見学に来られたのですが、子どもたちは事前に用意されたワークシートに従ってみな真剣に取り組んでいました。私たちが、大学立の博物館として最新の学術成果を反映させるとともに、小中学生の来訪者が多いからといって「子どもを子ども扱いたくない」展示を心がけたことについては、私としては一定の成果を出せたのではないかと自負しています。

しかしながら、「小学生には難しくなった」という声が聞こえてくるのもまた事実であり、その声にも真実があるのでしょう。リニューアルは決して完成ではありません。立命館大学国際平和ミュージアムはこれからも教育関係者の声や世界各地の博物館の実践から学びながら、成長し続けていきます。どうぞ、繰り返し足を運び、展示と対話してください。また、展示に対するコメント、改善意見もいただきたいと思っております。引き続きご関心をお寄せくださいますよう、よろしくお願いたします。

新しいスタッフとしての自己紹介と抱負

比留間 美子 (学芸員)

私が立命館大学国際平和ミュージアムで働き始めて前半が過ぎようとしています。気持ち的には自分自身が一番驚くくらい本当にあつという間でした。ここに来る前の私は埋蔵文化財・文字史料・自治体に遺る文化・地場産業といった内容と向き合う生活でした。多種の内容に共通していたことは「歴史的解釈をしながら調査し伝えていくこと」でした。

立命館大学国際平和ミュージアムでは歴史的資料、教科書で学ぶような歴史がたくさん展示されていますが、その解釈は「平和学に基づき、他学問との垣根を越える多様な相互理解、まさに多様性を具現化することを目指す解釈」のように私は感じています。

私が立命館大学国際平和ミュージアムを公式ホームページで見つけた際の第一印象は「一般の人は入っていいのかな?」「国際平和ミュージアムという名前からイメージする展示内容がいまいちピンとこないな…」というものでした。初めて足を踏み入れた日。私がイメージする平和ミュージアム、戦争ミュージアムを一新するかのような衝撃を体感しました。教科書にはないリアルな世界観。

過去の出来事、現在の出来事は人間がもつ本質的な部分が起因しているのではないかと…。私の中に新たな視点に気づかせてもらった瞬間でもありました。

過去の出来事、現在の出来事に誰もが興味をもち知ること、未来に起こりうる出来事…とりわけ不幸に繋がる出来事の回避を考えるきっかけとなるのではと実感しました。

また過去の出来事(文字が日本に伝わっていなかった時代も含めて)についても教科書や歴史書に書かれていることが必ずしも歴史そのものではなく、当時の価値観や常識と現在



のそれらが必ずしも一致しないにしても想像力を働かせて「当時の人たちの選択した理由、そうせざるを得なかった理由」というものをもっと多角的に考える基を自身の中につくることはできるのではないかな…と考えています。

立命館大学国際平和ミュージアムは立命館という学校法人が運営している博物館であり、一番の来館者数であってほしいのは、もちろん立命館の学生、生徒、児童の皆さんです。そして皆さんには立命館内外のたくさんのご友人を連れてきてもらいたい。自分自身の中に新たな芽をつくる時間を過ごしてもらいたいな、と考えています。

来館される皆さん、学生スタッフの皆さん、ボランティアガイドの皆さんと共により多くの話題を語り合っていきたいと考えています。

ボランティアガイドコラム

平和ガイドに携わって2年目となりました。まだまだ試行錯誤ですが、来館者と響き合えるガイドができればと思います。

私がここに今在るのは、若い頃に「平和のための大阪の戦争展」との出会いがあったからです。毎年夏には「戦争展」に行き(当時の大阪会場は通天閣)、現物資料や写真パネルなどから多くのことを学習しました。また、「平和」という詩との出会いがあったからです。街の書店で偶然見つけた詩集『子ども闘牛士』に収録されていた一編です。詩の作者は竹中郁(1904~1982年)、後に知ることとなりますが、旧制第二神戸中学校(現:兵庫高校)に入学し小磯良平(1903~1988年)と出会い、無二の親友となりました。また、先輩には沖縄戦最後の知事、島守知事として知られる島田勲(1901~1945年)がいます。特に島田勲のモニュメントが兵庫高校と沖縄の奥武山野球場にあり、訪れたことを思い出します。

近年、悲劇の現場を実際に訪れ、過去の出来事を知ったり、そのことについて考えるという旅行のスタイルである「ダークツーリズム」という言葉を聞きます。忘れてはならない歴史を訪ねる旅であることには間違いのないのですが、ダークは「暗い」・「闇の」・「暗黒の」という意味だと思えば、何だか物好きで、怖いもの見たさといったことを連想します。ネーミングにはいささか抵抗があります。「ダークツーリズム」ならぬ「ピースツーリズム」では如何でしょうか。

「日本は世界で平和博物館運動がある唯一の国である」

平和はいいなあ

平和

平和はいいなあ
どこにでも微笑が落ちている
どこにでもさざめきが散っている
山羊の乳房はぴんと張っているし
麦の倉庫はぶんぶん外までにおうし
水力発電機はハチのようにうなるし
平和はいいなあ

平和はいいなあ
平和は眼の底までしみこんでくる
平和はのどのおくまで飛びこんでくる
ねむり足りたあとのごきげん
たっぷり食べたあとのごきげん
十二分にやりとげたあとのごきげん
平和はいいなあ

引用: 竹中郁少年詩集『子ども闘牛士』より

(ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン)と云われます。調べてみるとと私、規模の大小(違い)はあるものの内容は多岐にわたっています。戦争・核・虐殺・災害・差別・貧困・公害・人権や民主主義などテーマは色々です。そんな中で、国立という名の「博物館」は広島と長崎の「原爆死没者追悼平和祈念館」だけのようです。国立の平和博物館はまだないのです。

立命館大学国際平和ミュージアムは未来の平和創造の拠点です。その一員として関りが持てて幸せです。すべての人々が平和の中で暮らせるように、より善きことのためにガイドができればと考えています。

(ボランティアガイド: 内田 準吉)

学生スタッフ 活動記録

学生プロジェクトスタッフ編

今年の6月から、当ミュージアムの新規学生スタッフとして活動させていただいております。活動内容としては、主にミュージアムのガイドに従事しており、来館者様に対して展示物を説明するだけでなく、来館者の方が思ったことや感じたことを聞き、私たちも含め、来館者の方々と対話ができるように促していくファシリテーターの役割を担っています。私自身まだまだ未熟ではありますが、来館者、同じ学生スタッフ、そしてボランティアガイドの方々とお話をすることで、毎回いろんな気づきがあり、多くのことを学ばせていただいています。

かつて日本が犯してきた、特にアジアに対する加害の歴史をなかつたかのように、あるいは美化するような発言をする人もいます。しかしこのような誤った歴史認識が、同じ過ちを繰り返し、さらなる犠牲者を生み出してしまいかもかもしれません。このミュージアムでは、太平洋戦争で日本が被った被害はもちろん、帝国主義の名の下に行ってきた他地域に対する加害、民間人・弱者に対する国家の暴力、気候変動や人権侵害、レイシズム、紛争など世界中のあらゆる問題が、過去から私たちが生きている現在に至るまで幅広く、写真や物、パネル等を通じて展示されており、学ぶことができます。戦争のない状態だけでなく、人々があらゆる恐怖に脅かされず、安心して生活

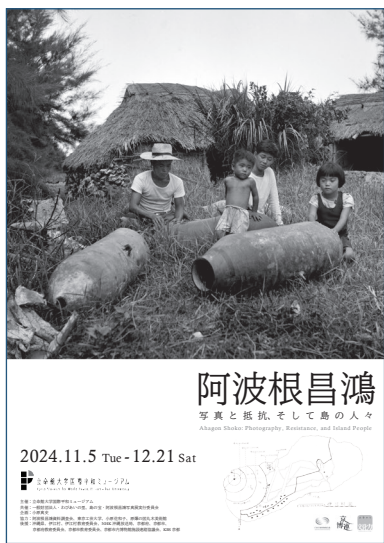
できる状態こそが平和であると私は考えます。もちろん平和の捉え方は人によってそれぞれ違います。日々の生活で、平和について深く考える機会は限られていると思いますが、このミュージアムに来ることで、自分にとっての平和とは何かをじっくりと考え、それをアウトプットできる、そんな場所であってほしいです。

現在もなお、世界中にはあらゆる問題があり、私たちの見えない所で多くの人々が犠牲を強いられているのが実態です。それらを簡単に解決することは難しいけれども、無関心ではなく、まずは問題意識を持つことが平和への第一歩だと考えます。そのためにも学生スタッフとして、この世界で起きているあらゆる問題、それらが生み出された歴史的背景などを来館者の方々に発信もしつつ、それを通じて対話を行い、みなさんと平和を創っていけるよう努力したいです。



(学生スタッフ：藤永 凜)

今後の展示スケジュール



2024年度 秋季特別展

「阿波根昌鴻 写真と抵抗、そして島の人々」

日時：2024年11月5日(火)～12月21日(土) 9:30～16:30 (入場は16:00まで)

会場：立命館大学国際平和ミュージアム・中野記念ホール

沖縄島北西部に浮かぶ伊江島では、沖縄戦で住民の約3分の1が命を失い、戦後も米軍による占領により島の約6割が軍用地として接収されるなど、住民たちの苦難が続きました。朝鮮戦争後の1955年に「銃剣とブルドーザー」と呼ばれる米軍による強制的土地接収が伊江島で始まった際、非暴力の土地闘争をリードして、その後に沖縄で展開される「島ぐるみ闘争」への端緒を開いたのが阿波根昌鴻(1901-2002)でした。

阿波根は、島民たちと協力して米軍の暴挙や闘争の記録を残すことを徹底し、伊江島で唯一のカメラを手に、3000枚以上の写真を撮影しました。近年、阿波根が土地闘争の様子だけでなく、住民たちのポートレートや日常のスナップを撮影していたことが分かりました。阿波根の写真集『人間の住んでいる島』(1982年)にも収録されることになったこれらの写真は、阿波根たちの土地闘争が何を守ろうとした運動であったのかを考えさせてくれます。

本展は、阿波根が1950年代半ばから1960年代半ばにかけて撮影した写真のうち約350点を展示し、戦争や開発による土地収奪が続けられている現代社会について問いかけようとするものです。

関連企画

12/7(土) 14:00～ 映画上映会&トーク「(非暴力)という生き方—阿波根昌鴻から何を学ぶか」

登壇者：大畑豊(わびあいの里) × 君島東彦(立命館大学国際平和ミュージアム館長)

※企画の詳細な情報については、後日当館HPにてご案内いたしますので、そちらをご覧ください。

今後のギャラリー企画展

描かれた加害—坂本正直が向き合った戦場体験

主催：所 薫子(坂本正直記念館)、中村 江里(上智大学准教授)

期間：2024年12月5日(火)～12月21日(土)

会場：立命館大学国際平和ミュージアム1階 企画展示室

物語と土地の力

—東日本・家族応援プロジェクトと福島を巡る旅—

主催：立命館大学人間科学研究科 東日本・家族応援プロジェクト

期間：2025年1月13日(火)・(祝)～1月30日(木)

会場：立命館大学国際平和ミュージアム1階 企画展示室

漫画で綴る

～いろいろ家族のショートストーリー『木陰の物語』～(仮称)

主催：立命館大学人間科学研究科 東日本・家族応援プロジェクト

期間：2025年1月13日(火)・(祝)～1月30日(木)

会場：立命館大学国際平和ミュージアムB1階 問いかけ広場

※2月以降の企画展示の附属校展示についてはHP等で掲載します。

遊心雑記

原発事故から13年経ったが

東京電力は、2024年8月22日、福島第一原発2号機で事故時に溶け落ちた核燃料デブリを数グラム取り出す作業に事故後初めてチャレンジしましたが、取り出し装置のパイプの接続ミスのため中断されました。事故からすでに13年、取り出すべき核燃料デブリは880トン（8億8千万グラム）と見積もられています。2051年に完了する予定の廃炉工程への影響が懸念されます。致死的なレベルの放射線環境ゆえに、作業は全部ロボットがやらなければなりません。特殊な多機能ロボットの開発も必要ですし、本当に全部の核燃料デブリを予定通り取り出せるのか、心配です。

地震と津波で核燃料溶融事故を起こした福島原発では、16～17万人が避難を余儀なくされ、今も戻らない人が3～4万人いると言われます。もちろん、戻っても仕事がないことや、医療などの社会的サービスを受けにくいこともありますが、戻りたくない理由の一つは、事故原発が未だに強烈な放射能を抱え込んだままあり続けていることです。廃炉は被災地域再出発の一丁目一番地ですが、それだけに、初めてのデブリ取り出し失敗は今後への懸念を増長させる事件でした。

先日、福島県の夜ノ森の回転寿司店を訪れる機会がありました。夜ノ森は美しい「桜のトンネル」で有名な街です。長い間「帰還困難区域」になっていましたが、2022年1月に立入規制が緩和され、桜並木が戻ってきました。私が訪れた回転寿司店はもちろん営業していなかったどころか、店内はあの震災の瞬間を冷凍保存したかのように、そのとき食事中だった人々が使っていた醤油の小皿や湯飲みやお手拭きなど

安齋 育郎（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）

がそのまま散乱していました。そこには、13年経っても目に見える形で震災を今に伝える被災地の姿がありました。しかし、福島には県民が目にすることもない核燃料デブリが、放射線という「目に見えない不安」を宿して存在し続けている現実があることも、忘れてはならないでしょう。



福島県浜通りの回転すし店にて（2024年6月8日）

2025年度 ギャラリー企画展の 公募が始まりました

立命館大学国際平和ミュージアムでは、企画展示室（1階）を使用した展示企画を募集しています。

本学構成員や市民のみなさまの積極的な応募をお待ちしています。

展示期間：2025年4月12日📍～2026年1月31日📍

展示会場：立命館大学国際平和ミュージアム1階 企画展示室

応募資格：当館の設立理念に賛同していただける本学構成員、個人および団体

応募期間：2024年10月15日📍～2024年12月13日📍

※詳しい募集要項や提出書類などはHPからご確認ください。

会場使用料
無料

立命館大学国際平和ミュージアムだより

 立命館大学国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University

第32巻 第2号（通巻94号）2024年11月29日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL：075-465-8151 / FAX：075-465-7899

<https://rwp-museum.jp>



HP



Instagram



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

今後、特別展のご案内、ミュージアムだより等、国際平和ミュージアムより送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、FAXにて国際平和ミュージアム（075-465-7899）へ送信ください。